

# ひねりの舞

Hineri no mai

語り手 上坪道利

聞き手 山本真紀

企画:高山市

取材日:令和2年11月30日

## はじまりと歴史

「ひねりの舞」は、9月18日の上小鳥八幡神社の例祭の時、特殊神事として奉納します。我々が口伝で聞いているには、明治40年ころ、今の場所に神社を移して、屋根の葺き替えをした時の祝いに「ひねりの舞」をやったのが最初だそうです。その後7年ごとに実施し、明治、大正、昭和、平成と世代交代しながら続いています。

「舞」そのものは、莊川から習ったと聞いております。しっかりした書いたものもないし、どうして7年ごとにしたのか定かではありませんが、けっこう、金も掛かるんです。いわゆる衣装やいろんな準備から何から。そしゃ、毎年もえらいし、祝いのめでたい数が「3、5、7」とあるんで、まあ7年くらいがいいんじゃないかって、7年ごとにしたのでなかろうかと推測してます。実際にやろうとすると相当な費用が掛かります。やはり、昔も、金も掛かったやろうし、どうだろうな、通常の祭りとみると、何か月も前から段取りも必要となる。我々が受けた時も、「まあ、7年ごとやぞなあ」ということでやってきました。実際に2年くらい前からある程度の予定が必要で、7年はちょうどベストな期間にもなっていると感じています。

## ひねりの舞について ~7年に1度の幻の舞~

以前、祭りは9月26日だったんです。だが、雨が多かったりして、伊勢湾台風の翌々年の昭和36年から 9月18日に変わりました。年によっては、土曜日や日曜日など人が出やすい日に替えたこともあるけど、今は9月18日にやっております。7月後半から9月の祭りの前日まで練習します。特に中学生は塾や部活があったり、他にもいろいろなことが出てくるもんで、前半は週に2回、中間は3回、後半1週間は毎日練習します。

祭り当日の午後2時ころ、上小鳥神社から200メートルほど離れた弘誓寺の御堂に集まり、小さい子から出演順に「顔づくり」や着付けなどの準備をします。まるで戦場みたいにざわめく中、午後5時ころに腹ごしらえをして、出番に備えます。午後7時になると、暗闇にかがり火を灯し、行列しながら神社へと向かいます。臨時の花道が作られた神社の境内では、郷愁昂る太鼓の音や笛の音色が響く中、八幡神社の提灯、獅子に続いて舞の先頭の「露払い」が登場し、次々に舞台上上がり、楕円形の輪になっていきます。舞台の中央で先頭の「露払い」と最後尾の「弓引」が交わったところで勢ぞろいです。時にはしなやかに、また、ある時は勇壮に舞います。観客はその楕円の中と外で観ます。最後には、掛け声も出て、だんだん舞う人も観る人も一体となっていきます。そうやってこの舞は午後9時ころまで続きます。

全国和牛能力共進会のアトラクションや NHK の名古屋放送局でやっ



上坪道利  
昭和22年2月10日生

## プロフィール

### <学歴>

清見村立夏厩小学校・中学校卒業  
岐阜県立斐太実業高等学校卒業

### <職歴>

1年間会社勤務の後、飛騨農業協同組合（清見農協・大野農協）に38年間勤務し、平成17年3月に58歳で役職定年退職

### <役職>

平成17年4月～23年3月  
清見地区社会教育主事  
平成23年4月～29年4月  
清見町まちづくり協議会会長

### <神社関係>

平成24年6月～ 岐阜県神社庁大野支部副支部長  
令和元年～ 岐阜県神社庁理事



たこともありますが、ステージやスタジオみたいな明るいところよりも薄暗い境内でやるほうが、風情がある。やはり場とか景色は大切です。

以前祭りを観た名古屋の方が感動したお礼にと、行列の様子を紙人形で作ってプレゼントしてくれたんです。それを「きよみ館」(清見支所の2階)に展示しています。これを見たら、行列のイメージがわくと思います。

## ひねりの舞保存会について

私は7歳の時から祭りに参加しております。最初は、「旗持」ってやつ。旗が重くて手がだるくなった記憶があります。その後は「奴」「弓引」を、44歳の頃は「獅子舞」をやりました。20歳くらいから、「ひねりの舞」はここにしかない大事なもんやで、なんとか続けていくべきやなって思った。清見村の時代に、「ひねりの舞」を全体的に保存することが必要やってことで、当時の清見村の指導で、「ひねりの舞保存会」を立ち上げました。初代の会長は、金子宗宣さん。私は、その後の2代目会長を務めました。今は大坪義己さんが3代目会長を務めています。

## 課題は人手不足

もともとは女性の役も男性が女装して演じていたが、今は「長刀」とか「箒持」は女性がやっています。「花傘」は小学1、2年生から募集しますが、もう少し待てば地元の子どものでできるなって時は、1、2年延ばして、9年目にやったこともあります。平成10年は初めて学校に上がる前の保育園児がやりました。「そりゃー、無理じゃないかよ」って話もあったけど、子どもはたいしたもんやな。本番では、しっかりやり、また、立つとるだけで絵になります。小さい子は、「家でもやってくれよ」と親さんに覚えてもらって、まあ、そんな恰好で、家族ぐるみの行事になっているわけです。

「ひねりの舞」は、「露払い」(12歳~14歳の男子1名)を先頭に、「花傘」(幼児2名)が入り、続いて「旗持」(小学生2名)・「箒持」(小学生または中学生2名)・「槍持」(中学生2名)・「鋏箱」(小~中学生2名)・「大傘」(中学生2名)・「奴」(成人2名)・「長刀」(中学生~成人2名)・「弓引」(成人4名)の間に「花傘」(幼児または小学生2名)が7組(14名)入り総勢39名で構成。出演人数により、「大傘」「奴」「長刀」等1組増やすと、「花傘」も1組増えることになって総勢43名から59名での実演です。私が小さい時は50人から60人ほどでしたが、最近は40人くらい。上小鳥の戸数は、多い時で35戸あり、子どもも冬季分校があるくらいたくさんおりましたが、現在は、13戸と激減してしまいました。限りある人数で、笛・太鼓・裏方業務等々、実施するのに人手が足りない状態です。



上小鳥八幡神社へ向かう行列



弓引



## 伝承するという事

こういう伝統の行事は、親から子、子から孫へと伝えていく。今までは世代交代や伝統の意識があって、世帯が減る中、なんとか上小鳥地区だけでやってこれたけど、平成3年ころから近隣の夏厩・二本木・池本など小鳥地区の子ども中心に参加をお願いしました。ここ2、3回は「今年で最後やぞ」「今年で最後やぞ」ってやってきました。

高山市が合併した時は「こりゃ、まあ、今年で最後やぞなあ」って。それで、その時に「記録をとるなら今しかないぞ」ってことで、高山市の絶大な支援で、丁寧に撮ってもらいました。その後もう1回はやれたけど、今やめてしまうと、ちょっと復活はできんかもしれんな。もし、やろうとすると相当なエネルギーがいるんで、次の1回をやらんと、もうできなくなってしまうかもしれません。本来ですと、令和3年度は、前回から7年目に当たり、実施する年ですが、昨年度の全体会議で、人手が足りないということで中止することに決定しています。やはり、人口不足でやり手がいなくなってきたのが一番の課題です。

私が子どもの頃は、役者の顔づくりは上小鳥の年輩の人達がやってくれました。舞つとると途中で汗と一緒に化粧が垂れてきたこともありましたが、今は美濃市からプロの人を呼んでいるのでそうしたアクシデントはなくなりました。莊川の祭りの時に鬘合わせをして、ちょうど、日程的な便宜はとれておりますが、この顔を描く人も高齢化してきて、なかなか難しい場面にあります。

他にも衣装の着せ方やたすきの結び方など、細かいことをやれる人が少なくなりました。代々それを習って教えてやってきたが、それが途絶えつつあり、継続の障害の一因となっている。履物は「わらじ」を使用します。「わらじ」も前は地元で用意できたが、ここずっと、他で作ってもらっています。「わらじ」を作る人そのものが、清見には1人か2人になってしまいました。

伝統芸能っていうか文化ってものは、そういう手作りの部分がないと成り立たちません。手作りの文化が残らんことには、伝統芸能の持続は難しい。

## そして、これから

全てのことに共通しますが、今はコロナの関係で語る機会も集まる機会もほとんどありません。今からは、コロナと付き合いながら文化財の在り方を検討していく必要があると思います。ただ、こういう神事はどこかが責任持ってやっていかないと、なかなかできません。神社の特殊神事として継続できるのかどうか。神社を離れて地域の伝統文化として位置づけ、継続できるのかどうか。そこらへんのコンセンサスをどうやって持っていかかですね。残せるものなら残したい。ただ、やはり、今地元におる人達が「やらまいかよ」っていう気持がないと、ちょっと難しいね。本当は続けられるといいけど、ちょっとそのエネルギーが持てないかも…。中には「ひねりの舞」を楽しみにしている人もいます。で



舞台



舞台





も、やっぱり子どもが少なくなってしまうと、なかなか難しいです。

いずれにしても、「ひねりの舞保存会」を中心に検討をしていく必要はあると思うんです。今まで実施してきた舞は、映像として残しています。近年は、高山市教育委員会文化財課の支援もあり、これも映像保存されており、所作の伝承はそれらを参考にすれば継続は可能だと思います。要は、実施するに当たっての物理的な方策をどう組み立てるか。これが解決できれば、伝承していけるのではと思います。なんとか伝承していく気運がでてくるといいんですが。これが清見全体でうまくまとまっていけば、少子化の中でのひとつの起爆剤になっていくかな。こういうのをきっかけに、地域全体の活力の一助になればいいですね。文化を伝承するには、いろんな絡みがあります。思いを伝承することも大切なことかな。本当はここで、「必ずやります」と話せばいいのですが、今は、そこまではちょっと…。でも、個人的な思いとしては、本来なら7年ごと、別に9年なら9年でもいいけど、「ひねりの舞」をやれることを願っています。



上小鳥八幡神社

